

# 広域交流拠点モデル体制の 普及に向けた事例集

—平成27年度 農林水産業活性化推進拠点整備事業—

平成28年3月  
沖縄県農林水産部村づくり計画課

# 目次

1. はじめに
2. 事業の経緯
3. 事例紹介

## 事例1：やんばる3村の広域連携（ヤンパク）

- （1）地域の概要
- （2）推進組織の概要・これまでの取組み
- （3）連携推進の経緯
- （4）今後の展開
- （5）参考

## 事例2：いいな3村の広域連携

- （1）地域の概要
- （2）推進組織の概要・これまでの取組み
- （3）連携推進の経緯
- （4）今後の展開

## 4. まとめ

連絡先

# 1. はじめに

- グリーン・ツーリズムとは、「緑豊かな農山漁村地域において自然、文化、人々の交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義され、県内においての農山漁村ののどかな暮らし、情緒あふれる伝統文化、また亜熱帯特有の農林水産物を使った食文化などの体験・交流が魅力となっている。
- 一方で、県内の農山漁村地域では高齢化や人口減少の進行に伴い、耕作放棄地の再生やコミュニティの維持などの課題が顕在化している。
- このようなか、修学旅行を中心に交流人口が増加傾向にあるグリーンツーリズムについて更なる発展を図るためには、受け入れ側の実践者の増員や体制整備が求められている。
- これに対する取り組みとして、複数地域の連携によるグリーン・ツーリズムの拠点化が考えられる。地域間での連携により大規模な団体を受け入れることや、共通コンセプトのもと多様な受け入れプログラムを開発することなど、単独地域では解決が難しかった課題に対して広域化により、受け入れの量・質の向上が期待できる。
- 本事例集は、複数地域連携による取組について、今後の参考となるよう、モデル体制づくりの経緯や取り組み内容について取りまとめたものである。

## 2. 事業の経緯

- 平成23年度～平成27年度の4カ年にわたり、「農林水産業活性化推進拠点整備事業」により、農山漁村交流拠点化の取組を行った。
- 隣接する市町村の中で地域の要望やポテンシャルの高い地域をモデル地区として選定した。
- 具体的には、県内において一次産業を基幹産業とする農山漁村の中から、地域資源やグリーン・ツーリズムの取組状況などの特徴により、やんばる3村（国頭村、大宜味村、東村）、いいな3村（伊平屋村、伊是名村、今帰仁村）を選定した。

### <選定理由>

対象地域	説明	選定理由
やんばる3村	国頭村 大宜味村 東村	これまでも大型学校の民泊受入などで連携型の実績のあり、さらに一体的な取り組みが望まれたため。
いいな3村	伊平屋村 伊是名村 今帰仁村	荒天時の代替受け入れや、特色のある連携型のプログラムづくりなどの連携のポテンシャルが高いと考えられるため。

- 本事業では農山漁村における「広域交流拠点」の体制づくりに向けて以下の3段階を通じた取組を行った。
  1. 農山漁村体験として商品化する素材の掘起しを目的とした基礎調査
  2. 継続的かつ計画的な取組を行う地域推進拠点体制の構築
  3. 3村連携による体験交流プログラムやコミュニティ・ビジネスの実証・フォロー

<スケジュール>

対象地域	選定理由	H24	H25	H26	H27
やんばる3村	基礎調査	■			
	体制構築		■		
	実証・フォロー			■	■
いいな3村	基礎調査		■		
	体制構築			■	
	実証・フォロー				■

# 3. 事例紹介



## 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

### (1) 地域の概要

○ 沖縄本島の北端に位置し、「山々が連なり、<sup>うっそう</sup>鬱蒼とした森が広がる地域」として山原(やんばる)の森が80%を占める豊かな自然に恵まれている。



▲ 芭蕉布の里、喜如嘉集落



▲ 沖縄本島最大級の水量を誇る比地大滝



沖縄県



国頭村

大宜味村

東村



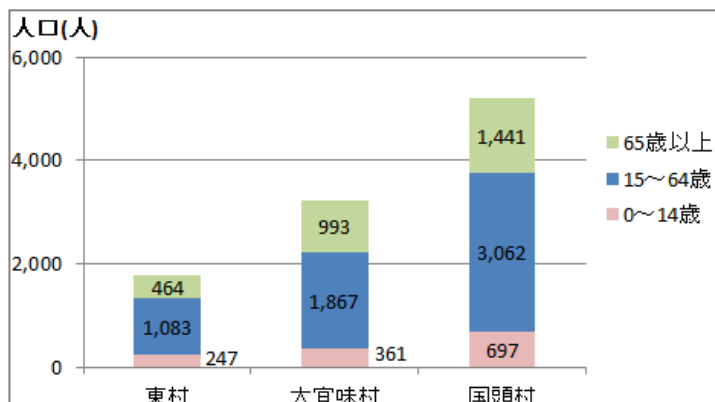
▲ マングローブ林が広がる慶佐次湾





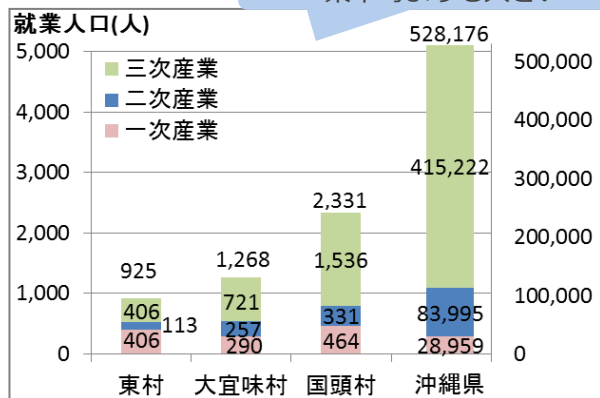
# 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

- 第一次産業が基幹産業となっており、沖縄県を代表する特産品を有する。
- 一方で、人口の流出、少子高齢化、過疎化、農林漁家の後継者不足による地域活力の低下、農地・森林の荒廃化などへの影響が懸念される。



▲年齢別人口

一次産業従事者の割合が  
県平均よりも大きい



▲産業別就業人口

## 【各村の主要農産物】



▲東村：パイナップル  
(NPO法人東村観光推進協議会HP)



▲大宜味村：シークワサー  
(大宜味村役場HP)



▲国頭村：イノブタ  
(国頭村役場HP)

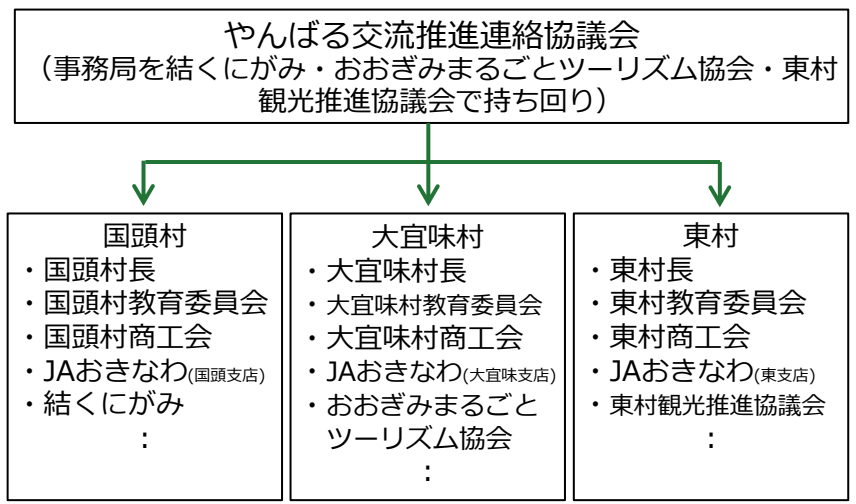


# 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

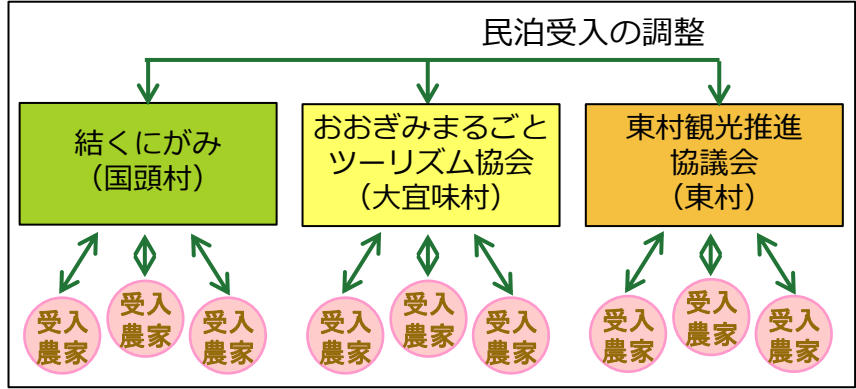
## (2) 推進組織の概要・これまでの取組み

- 平成20年から子ども農山村交流プロジェクトに取り組み、「やんばる交流推進連絡協議会」を軸とした3村の連携体制が確立されてきた。
- 民泊においては、「合同会社結くにがみ（国頭村）」、「NPO法人おおぎみまるごとツーリズム協会（大宜味村）」、「NPO法人 東村観光推進協議会（東村）」が連携し、大型学校の受け入れを行っている。

【やんばる交流推進連絡協議会を軸とした3村の連携】



【民泊受入の連携】



＜受入民家の軒数＞  
 国頭村24軒、大宜味村35軒、東村60軒  
 (平成24年度時点)

相互に連携して民泊受入を実施



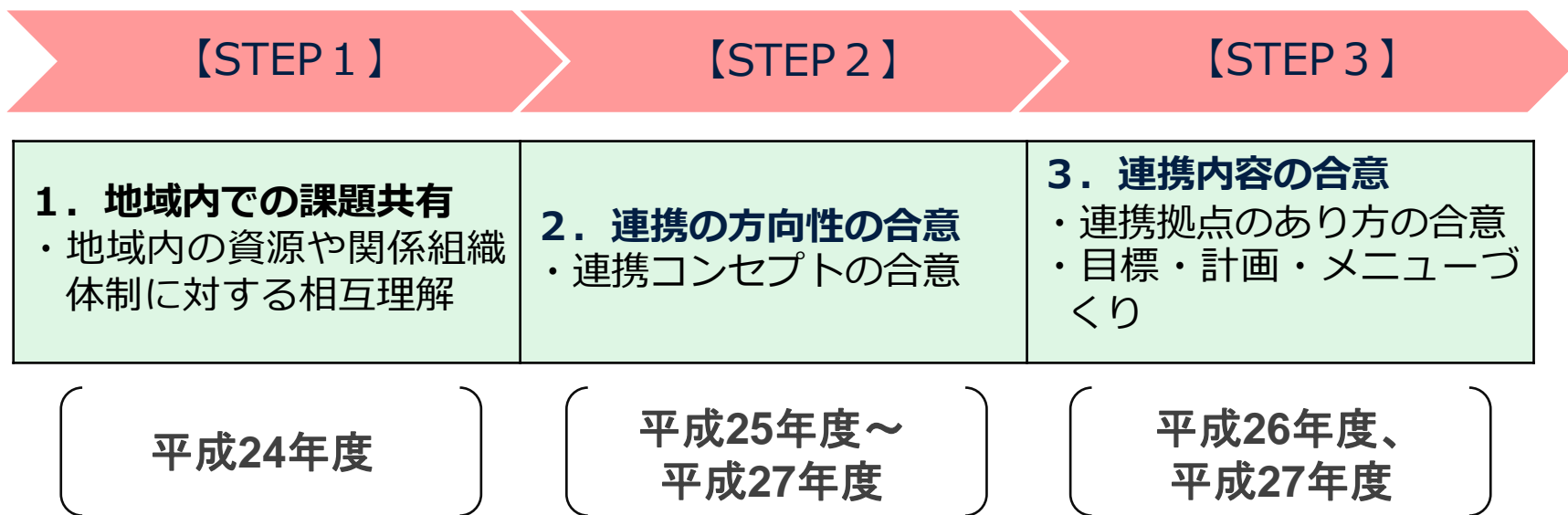


# 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

## (3) 連携推進の経緯

- 複数地域の連携による交流拠点は、以下のような段階をへて推進してきた。

### 【連携のステップ】





# 事例1：やんぱる3村の広域連携（ヤンパク）

## 【平成24年度の取組・平成25年度の取組】

【STEP1】

【STEP2】

- 3村行政やJAなど幅広い主体が加入する「やんぱる交流推進連絡協議会」の運営実態や、3村の団体によるこれまでの取組体制や取組実態を踏まえ、今後の3村の連携の促進に向けた話し合いを行った。

### ＜取組課題＞

- ・ 民泊の受け入れは3村の団体「結くにがみ」、「おおぎみまるごとツーリズム協会」、「東村観光推進協議会」がそれぞれ進めるなか、取組の進捗や実績に差があり、連携をさらに進め、窓口を一元化することについては合意が困難だった。



### ＜取組成果＞

- ・ 民泊の一元化は“将来的な取組”とし、3村での体験交流プログラムを軸とした窓口の一元化を図ることとした。(具体的には、3村連携型の体験交流プログラムやコミュニティ・ビジネスの案を検討した)
- ・ ブランドネームを「ヤンパク」とし“ヤンパク事務局”を東村観光推進協議会におくこととした。法人化を視野においた拠点化を想定した。
- ・ 3村の受入民家の交流会を兼ねたワークショップを行い現場レベルでの交流会を行った。



◀話し合いの様子

#### サブタイトル

山原で民泊！森の里で暮らすおきなわ旅

#### タイトルに込めた言葉とイメージ

「ヤンぱる」×「民泊」×「わんぱく」(アクティブ感)

#### ヤンパクとは…堅めの定義

「ヤンパク」とは、やんぱる3村(国領村・大宜味村・東村)の豊山漁村の活性を目的とした、3村連携による民泊及び民泊前後の日に実施される体験プログラム、また3村連携で開発されたオリジナル商品や観光サービスを指します。



▲ヤンパクのロゴ



◀受入民家によるWSの様子



# 事例1：やんばる3村の広域連携（ヤンパク）

【平成24年度の実施・平成25年度の実施】

【STEP1】

【STEP2】

## ○ 連携型の体験交流プログラムの作成。

- ・ 大型民泊受入の際のヤンパクとしての共通的なプログラムを作成した。

自然 体験	カヌー体験 【所要時間】2時間 【料金】4,000円(保険料込)		シュノーケリング体験 【所要時間】3時間 【料金】5,000～6,000円(保険料込)	
	森林散策 【所要時間】2時間 【料金】4,000円(保険料込)			
環境 保全 活動	グリーンベルト植栽体験 【所要時間】2時間 【料金】1,500円(保険料込)		ビーチクリーン体験 【所要時間】2時間 【料金】1,500円(保険料込)	
伝統 文化 体験	エイサー体験 【所要時間】2時間 【料金】4,000円(保険料込)		琉舞・琉装体験 【所要時間】2時間 【料金】4,000円(保険料込)	



# 事例1：やんばる3村の広域連携（ヤンパク）

## 【平成26年度の取組】

- ヤンパクの持続的な運用が行われるよう、平成25年度検討した連携型の体験交流プログラムの実証を行うとともに、コミュニティ・ビジネスの運用スキルの向上を目的として、専門家を招聘した勉強会を開催した。

### <取組課題>

- ・ 連携型の体験交流プログラムについては、メニューの具体化や地域間の情報共有が求められた。
- ・ コミュニティ・ビジネスは、連携推進に向けた実施メニューの具体化が必要とされた。  
規格外野菜の販売などトライアルを行ったが、産品集めや流通網づくりは持続的なものとならなかった。

### <取組内容>

- ・ 3村体験交流プログラムのモニター体験実証及び改善策の検討（モニターの実施、座談会・振り返りの実施）
- ・ コミュニティ・ビジネスの販売戦略立案の習得（会議の開催、戦略立案プロセスの習得）



▲野菜販売の様子



▲コミュニティ・ビジネス勉強会



◀体験モニターの様子





# 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

## 【平成27年度の取組】

【STEP2】

【STEP3】

- ヤンパクの持続的な運用のために連携コンセプトや今後の行動計画の策定を行った。

### <取組課題>

- ・ 持続的な連携のためには現場レベルでの交流促進や、これを進めるための交流のコンセプトを再確認することが必要となった。
- ・ 3村連携や行政との協働の具現化に向けて、連携に関する目標や計画の具体化が必要となった。



### <取組内容>

- ・ 過年度の成果を活用しつつ、3村共通の魅力に着目し、連携コンセプトを策定した。
- ・ ヤンパクの今後の行動計画を策定した。
- ・ 交流に資する取組を行った。



▲花と食のフェスティバルへの出店の様子



▲コンセプト検討の様子



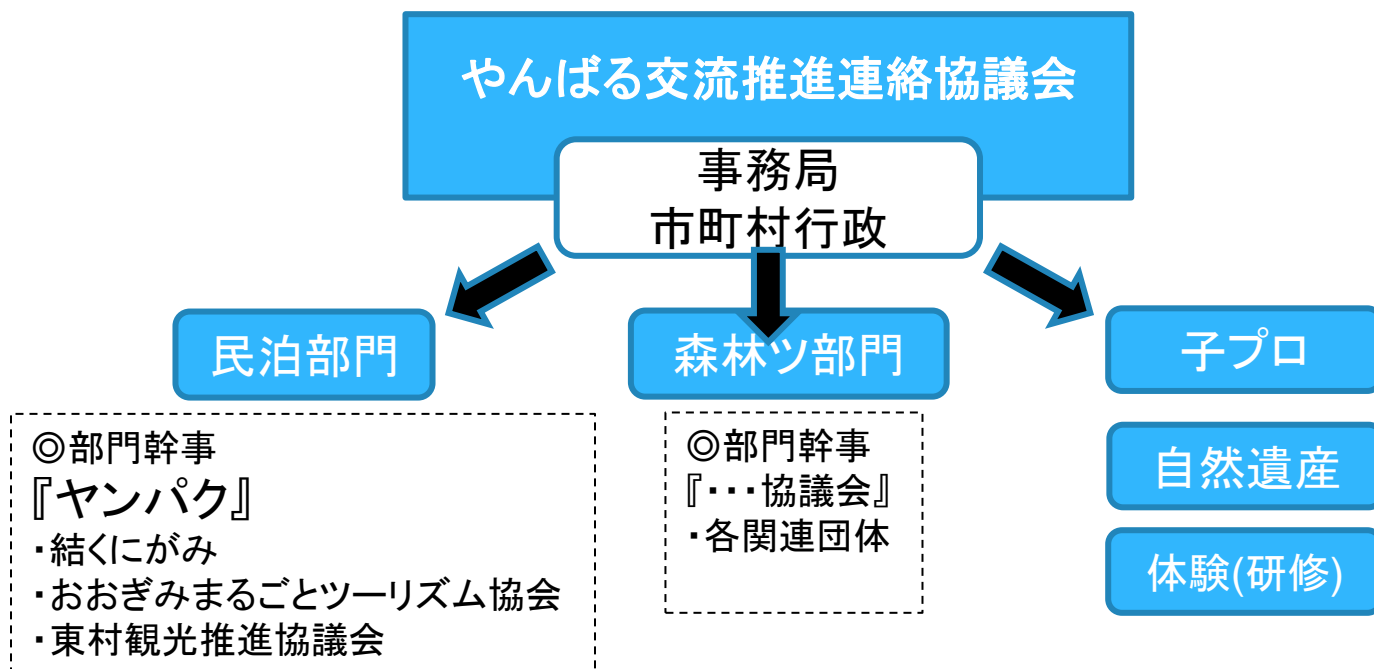
▲話合いの様子 (行政への取組報告)



# 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

## (4) 今後の展開

- ヤンパクについては、「取組計画」に基づき、地域ブランドを活かした取組を進める進めることとなった。
- 一方で、昨今、民泊の連携以外にも、世界自然遺産登録に向けた動きなど、3村連携による動きが活発化してきている。
- このため、「やんばる交流推進連絡協議会」についても、民泊以外の3村連携の部門横断的な動きに対応する必要がある、事務局についても、市町村など公共主体が担うことが望まれ、今後の検討課題となった。





# 事例1：やんばる3村の広域連携（ヤンパク）



## （5）参考①-ヤンパクのあり方



### 1. 3村・ヤンパクの将来像（10年後の姿）

○日常生活で見失いがちな人としての原点を、大自然のなかでの体験や、素朴な人々との交流の中で見つめる。そんな原点回帰と元気回復の旅を提供。地域に活力を取り戻し、リピーターとは「おかえり」「ただいま」といえる絆を作り上げる。

### 2. ヤンパクの地域ブランド

#### <ブランドの核>

○水は川がくれる、魚は海からもらう、野菜は大地が育む、肉は命が与えてくれる・・・自分が幸せに暮らせるのは自然の偉大な恩恵であることに気づく。

○やんばるのコミュニティで生活するとき、血縁関係を超越した家族の一員として自分が大事にされていることを実感し、同時に仲間を大事にすることの大切さに気づく。

#### <ブランドの価値>

○大自然や素朴な人々と楽しく関わっていくなかで、自分自身の原点や人間本来のあり方に気づく。この「気づき」こそ、ヤンパク最大の価値である。

#### <ブランドメッセージ>

○希少生物が息づく自然、それと一体となった生活、飾らないけれど優しい人々。その暮らしをのびのびと体験することで心の原風景に触れてもらい、大きな感動と未来への活力を得ていただく。



# 事例 1 : やんばる 3 村の広域連携 (ヤンパク)

## (5) 参考②-行動計画

	短期 (本年度~来年度) 【データは 2010 年】	中期 (5 年後まで) 【2020 年】	中長期 (10 年度まで) 【2025 年】
	・人口 (高齢化率) 10,201 人 (26.1%) ※3 村合算 ・民泊受入数 12,400 人	・人口 (高齢化率) 9,103 人 (33.4%) ※3 村合算 ・民泊受入数 13,500 人	・人口 (高齢化率) 8,586 人 (37.2%) ※3 村合算 ・民泊受入数 14,900 人
拠点化の推進	○窓口の一元化に向けて、内部ルールの統一化を図っている。 →現状、不整合のある受入ルールの統一化を図る。	○窓口の一元化を図っている。これに対応した拠点組織を立ち上げている。 →3 村の体外的な窓口を統一化し、一元化対応を図っている。 →これに対応した拠点組織を立ち上げている。	○一元で効率的に運用され、組織が独立採算化している。(地域商社機能を担っている) →3 村の受入組織について収益を元に独立採算化を果たしている。(開発した商品の販売促進・収益の創出)
受入体制充実	○新たな顧客 (大人や外国人) の受入に向けた準備を進めている。 →新たな顧客の受入のためのスキルアップを進めている。	○新たな顧客 (大人や外国人) の受入を実際に進めている。 →大人や外国人といった新たな顧客の受入体制を構築し、受入を進めている。	○大人や外国人の受入について拡大を行っている。さらなる顧客拡大を進めている。 →大人やインバウンドの受入を更に進め、取組を強化している。 →また、情報発信を行いさらなる顧客拡大を進めている。
新規商品開発	○ヤンパクの取組と相乗効果のある商品企画を行っている。 →3 村の魅力を発信する商品や、民泊での消費が期待できる商品の企画を行なう。	○ヤンパクの取組と相乗効果のある商品の販売が進められている。 →3 村合同で商品開発・販売を推進している。 →民泊での消費が期待できる商品を販売している。	○ヤンパクの取組と相乗効果のある商品の販売が進められている。ヤンパクのブランドが発信出来ている。 →一元窓口を中心とした商品の展開により、ブランドを発信している。
その他	○行政協働による営業活動、観光 PR の実施。 ○新規の民泊参加農家の増加を促進。(大型校や、現受入民家の高齢対策) ○3 村のフィールドを使った観光イベント・スポーツイベント等の開催 ○三村協働でのイベントへの出展などの実施。 ○環境・自然保護活動の強化 ○3 村行政も含む定期的な話し合いの場の設置。		
	○行政からの支援はなく、協働関係を持續している。		

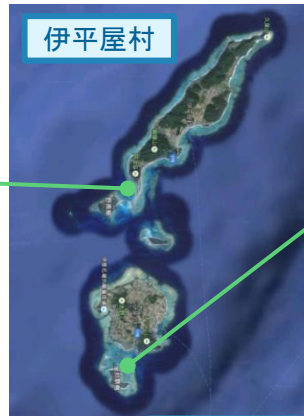
# 事例 2 : いいな 3 村の広域連携

## (1) 地域の概要

- 伊平屋島・伊是名島は沖縄本島の北西に位置する最北端の有人島であり、今帰仁村運天港よりフェリーが運航している。
- 平成25年から3村連携による「いいな運天港いちゃり場まつり」が開催され、連携の動きが始まった。



▲野甫大橋（伊平屋村役場HP）



▲海ギター、陸ギター  
（一般社団法人いぜん島観光協会HP）



**【運天港】**

一日2便、伊平屋行と伊是名行のフェリーが就航

沖縄県

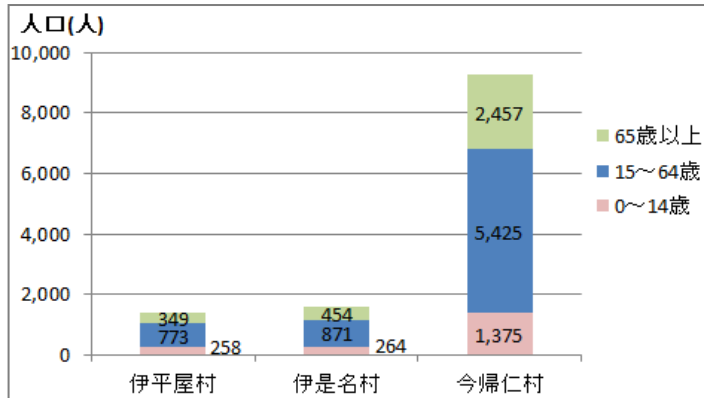


▲フクギ並木  
（一般社団法人今帰仁村観光協会Facebook）



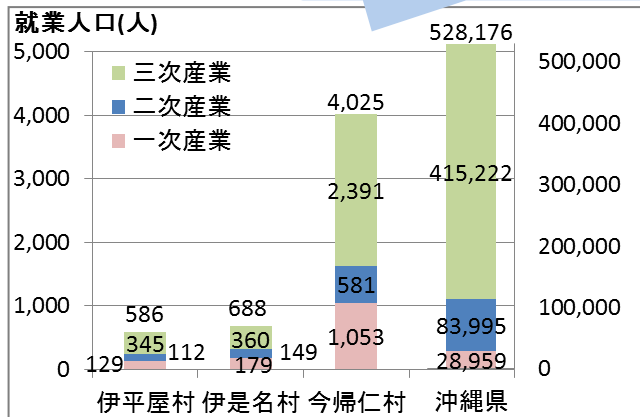
## 事例2：いいな3村の広域連携

- 県内でも第一次産業が盛んな地域であり、都市と農山漁村との交流コンテンツを有している。
- 一方で人口の約25%を高齡社が占めるなど担い手不足が顕著化している。



▲年齢別人口

一次産業従事者の割合が  
県平均よりも大きい



▲産業別就業人口

### 【各村の主要農産物】



- ▲上/伊是名村：尚円の里  
(伊是名村尚円王生誕600年祭公式サイト)
- 下/伊平屋村：てるしの米  
(伊平屋村役場HP)



- ▲上/伊是名村：サトウキビ  
(一般社団法人いぜん島観光協会HP)
- 下/伊平屋村：もずく  
(伊平屋村漁業協同組合ブログHP)



- ▲今帰仁村：今帰仁スイカ  
(今帰仁村役場HP)



- ▲今帰仁村：今帰仁アグー  
(今帰仁村役場HP)

## 事例2：いいな3村の広域連携

### (2) 推進組織の概要・これまでの取組み

- 3村における連携した取組みはこれまでにはなく、各村が独自に個別で行っている状況であった。
- 伊是名村、今帰仁村においては平成24年度に、伊平屋村においては平成26年度に「観光協会」の立ち上げを行った。

#### <受入民家の軒数>

伊是名村57軒、伊平屋村21軒（ホームビジットのみ）、  
今帰仁村20軒  
（平成25年度時点）



▲もずく加工体験（伊平屋村実施）



▲収穫・農耕体験（伊是名村実施）

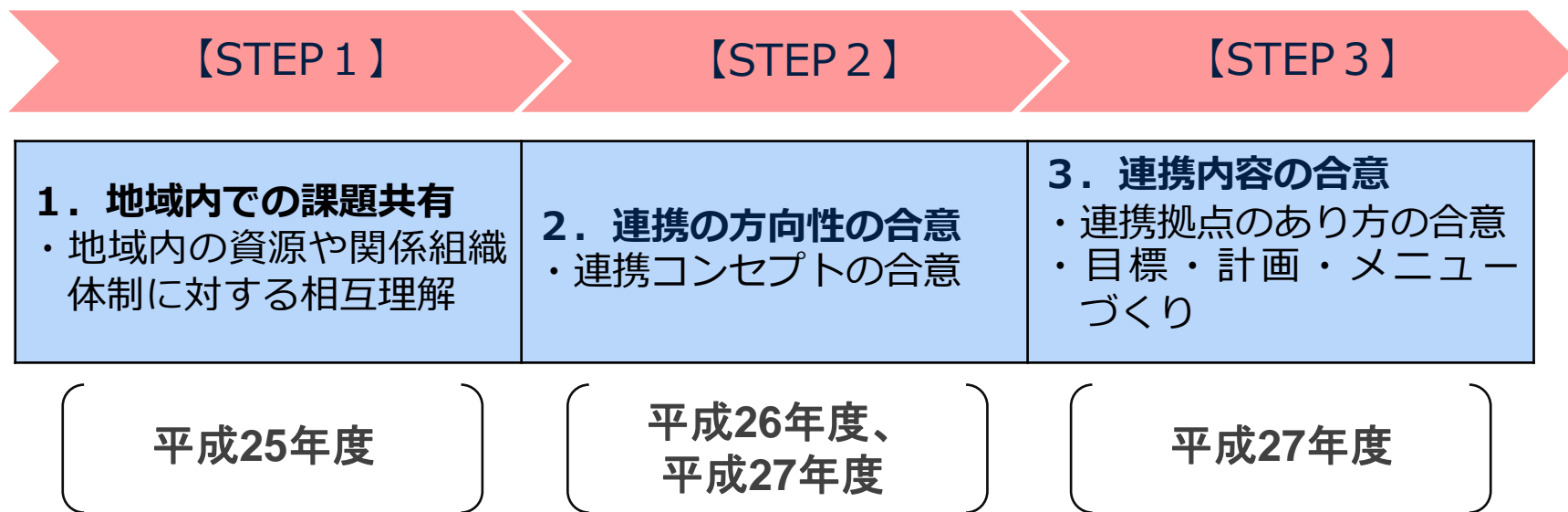


▲染色体験（今帰仁村実施）

# 事例 2 : いいな 3 村の広域連携

## (3) 連携推進の経緯

【連携のステップ】 ※再掲





## 事例2：いいな3村の広域連携

【STEP1】

【STEP2】

### 【平成25年度の取組】

- 現状の取組状況や運営体制、課題などについて現状を共有し、今後の連携可能性について意見交換を行った。今後の3村の連携促進に向けた話し合いを行った。

#### <取組課題>

- ・ これまでに連携実績は実質的になく、民泊については独自に受入体制づくりを進めており、各村の取組内容や連携の可能性が見えない状況にあった。



#### <取組内容>

- ・ 各村の取組状況や課題を共有し、連携の可能性について意見交換を行った。
- ・ 荒天時のフェリーの運休時の受入振替については、今帰仁村における受入など地域内連携による受入強化について意見交換を行った。



▲話し合いの様子

## 事例2：いいな3村の広域連携

### 【平成26年度の実践】

【STEP2】

- 3村の連携のコンセプトを検討することを通じて、将来を見据え連携していくことの意義を実感した。

#### <取組課題>

- ・ 3村の連携を推進することによる実質的な効果やメリットの大きさについて、実感できない状態にあった。



#### <取組内容>

- ・ 3村のもつ魅力、資源に着目し、地域の共通性や相違点を認識。連携のコンセプトを検討した。
- ・ これを元にコミュニティ・ビジネス、体験交流プログラムの案を検討した。



▲ワークショップの様子

## 事例2：いいな3村の広域連携

### 【平成27年度の取組】

- 体験交流プログラムやコミュニティビジネスの実証を行なうとともに、連携事項の具体化を行った。加えて持続的な連携体制の検討を行った。



#### <取組課題>

- ・ 商品化や地域の魅力発信の観点から、体験交流プログラムやコミュニティ・ビジネスの案の具体化を図る必要がある。
- ・ 持続的な組織とするための検討を行なう必要がある。



#### <取組内容>

- ・ モニターツアーを前提にブラッシュアップを図る勉強会を開催した。また、モニターの実施が困難な状況にあったため、魅力化の勉強会を実施した。
- ・ 試作品を作り検証を行った。



▲勉強会の様子



▲話し合いの様子



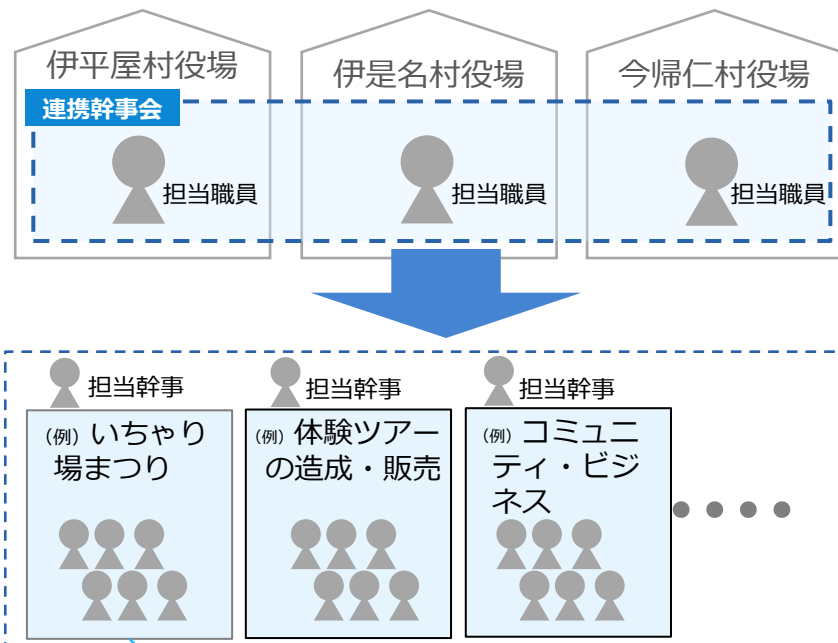
▲パッケージ案

## 事例 2 : いいな 3 村の広域連携

### (4) 今後の展開

- 体験やコミュニティ・ビジネスは、今後もビジネス展開が可能なよう検証の結果を踏まえて継続検討を行なう。
- 連携組織は、無理なく持続できるように、各村で担当職員を指名して行政担当者を軸に体制をつくり、具体の活動については観光協会等の必要な関係者を巻き込みながら実施する形態を目指すこととした。

【いいな 3 村連携体制 (案)】



- ・ 3 村の役場がそれぞれ担当職員を配置。「連携幹事会」を実施。
- ・ 連携の窓口・旗振り役となる

- ・ テーマに応じて必要な関係者を巻き込んだ推進ワーキングを形成。
- ・ 「担当幹事」を決めて、担当職員と連携を取りつつ推進する。

「推進ワーキング」：観光協会、商工会、JAなどの関係主体の担当者で形成

## 4. まとめ

2つのモデル地区取組を通じた拠点整備のポイントを以下に整理する。

- 連携の目的は地域の持続のためであることを意識する  
グリーン・ツーリズムやコミュニティビジネスは、あくまで地域の持続のための手段である。  
地域全体でメリットが享受できる取り組みとすること、このことを地域住民にしっかり理解していただくことが重要である。
- 連携の意義を自分たちの内側から見つけること  
地域間の競争が存在するなか、地域の強みを生かすことが必然となる。  
そのためじっくり地域のつよみについて内省する必要がある。
- 持続的な取組のための体制への行政の関与  
拠点の持続のためには、収入を得て取組を自走する方法を見出すことが必要である。一方で、グリーン・ツーリズムは公益的な取組であり、行政の関与による公益事業としてのバックアップ体制が必須である。

# 連絡先

沖縄県 農林水産部 村づくり計画課

住所：〒900-8570 沖縄県那覇市泉崎1-2-2 行政棟10階（南側）

電話番号：098-866-2263

FAX番号：098-869-0557

ヤンパク / ヤンパク事務局(NPO法人東村観光推進協議会内)

住所：〒905-1204 沖縄県国頭郡東村字平良471-24

電話番号：0980-51-2655

FAX番号：0980-51-2656



いいな3村 / «問い合わせ窓口» 一般社団法人今帰仁観光協会

住所：〒905-0401 沖縄県国頭郡今帰仁村字仲宗根230-2  
今帰仁村コミュニティセンター1F

電話番号：0980-56-1057

FAX番号：0980-56-1255

